

保育の中の小さなこと大切なこと ④

守 永 英 子

幼稚園の子どもたちの、帰りぎわのひとつは忙しい。庭

や、保育室で、精一杯遊んだあとの遊具の片づけや、子ども

の身仕度——それもぬれたエプロンをはずしたり、汚れた靴

下の替えを出してあげたり、三歳児のクラスならば、コート

の袖を通したり、ボタンをかけたたりも手伝う。できないところ

は大人が手伝って、きちんと身仕度をして帰るようになる

ことが、子どもが自分で出来るようになったとき、きちんと

することへつながってくると思うからである。

「上手にボタンとめられたけど、一つずれちゃったわね」

と、とめなおしてあげたり、「B子ちゃん、お隣のC夫ちゃん

のえりを直してあげてね」と、子ども同士の手伝いを頼ん

だりしながら、子どもたちの身仕度を見とどけ、ひとりひと

りの表情の中に今日一日の生活を読みとりながら、「さよう

なら」のあいさつをかます。

三歳児クラスの三学期の、そのような帰りぎわのひとつと

き、いつものように、子どもたちの仕度を手伝いながら、ふ

とA子がスカーフを逆にかぶっているのに気づいた。対角線

に二つに折ったスカーフのかどが、前でひらひらしている。

「A子ちゃん、スカーフが反対になってるわ」と声をかけな

がら直そうとした時、「いいの」と強い調子の拒絶にあった。

「これでいいのよ」

私は、虚を突かれた感じであった。たしかに、小さい子ども

にも、自分なりのつもりがあって、「エプロンをとって上

着を着る」とか、「コートを着ないで持っていく」などの強

い主張に出会うことはしばしばある。そして、特に支障のな

いかぎり、子どもが自分の主張を通すことに、あまりこだわらないことにしている。子どもの方でも、コートの上り返しや、ボタンのかけ違いなど、誰がみても分かるような状況では、私が直してあげることに抵抗がなかったから、A子の拒絶は、思いがけないことであった。

私は、次つぎ、他の子どもたちの仕度を手伝いながら、「A子ちゃん、鏡でみてごらんなさい。とがった方が前にきているから反対だと思うけど……」と言ってみた。A子の気持ちを傷つけないように、さり気なく言ったつもりであったが、A子は「これでいいの」と言っただけで、鏡を見に行こうとはしなかった。かといって、そのままかぶって帰ったわけでもなかった。私が他の子どもたちの仕度を手伝っている間に、そつとスカーフをぬいで、ポケットにしまいこんだのである。

表面から見れば、これだけの、小さな出来事であった。しかし、妙に心に引っ掛かるものがあった。スカーフの前後を逆にかぶるなどは、さ細なことではないか……。私の心にかかったのは、この小さなことが一つにも、他を入れない彼女の世界の固さであった。もしA子が、がん固にそのまま帰

ったとしても、私はこれほど気にしなかったのではないかと
思う。それは単に「受け入れない」という以上の、壁の厚さ
であり、心と心の距離感であった。

A子は、その能力と固さから、一見、自立的に見える子どもである。しかし、自立とは他人の立場や意見に耳をとざして、頑固に自己の立場に固執するものではないであらう。周囲から多くのものをとり入れながら、これから成長していかなければならないA子にとって、他人の意見も、必要に応じてとり入れられる柔軟さが必要である。柔軟さを持ちながら、最終的には「自己の立場」で判断を下せる……そんな人に育ってほしいと思う。

四歳児のクラスでは、クラスの人数もふえ、先学期末に変りかけていた友人関係を、一そう変えてしまうかもしれない。その中で、彼女がどのように適応していくであろうか、見守っていかなければならない。

そして、私自身、彼女の世界にどこから近づき、ノックしたらよいのだろうか。もう一度、考え直してみなければなら
ないと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)